学位論文審査報告書

氏　　名　：　赤羽　奈津子
報告番号　：　甲189号
学位の種類　：　博士(文学)
論文題目　：　朝鮮三国時代における対外関係史研究

I.　前言

赤羽奈津子氏が提出した学位請求論文『朝鮮三国時代における対外関係史研究』（A4版409ページ）は、従来、どちらかといえば中国を中心とする冊封体制の枠内で論じられてきた4〜7世紀における朝鮮三国（高句麗・新羅・百済）の対外関係について、三国の主体的な冊封体制への関わりをそれぞれの内部事情と交流・抗争を視野に入れて追究し、また冊封体制の枠外で営まれた朝鮮半島南部の金官加耶と倭の交易、その後の加耶地域をめぐる三国と倭の外交の変遷、三国への中国北朝からの仏教の伝播などの諸問題について考察して、総合的かつ多元的に把握し直そうとした意欲作である。

本論文の内容を目次で示せば、下記のとおりである。

序論
　第一節　古代東アジア対外関係史の現在
　　第一項　古代における対外認識と交流範囲
　　第二項　東アジア対外関係史研究動向
　第二節　本論文の課題
　第三節　本論文の構成
第一章　朝鮮三国の対中国関係
　第一節　本章の目的
　第二節　高句麗の対中国関係
　第三節　百済の対中国関係

第四節　新羅の対中国関係
第五節　小結
第二章　高句麗と粛慎朝貢
第一節　本章の目的
第二節　粛慎に関する先行研究
第三節　魏晋南北朝時代の粛慎朝貢
第一項　曹魏・西晋と粛慎
第二項　南北朝と粛慎
第四節　高句麗と粛慎朝貢
第五節　小結
第三章　加耶諸国の対外関係
第一節　本章の目的
第二節　金官加耶の鉄
第三節　金官加耶に対する倭の軍事的援助
第四節　加耶諸国の衰退と倭
第一項　大加耶と倭
第二項　日本列島における製鉄
第五節　小結
第四章　六世紀の日朝関係
第一節　本章の目的
第二節　欽明期（五四〇～五七一）の日朝関係
第三節　敏達期（五七二～五八五）の日朝関係
第一項　高句麗との関係
第二項　敏達期の対外政策
第四節　推古期（五九三～六二八）の日朝関係
第一項　遣隋使の派遣
第二項　推古期の対外政策
第五節　小結
第五章　古代朝鮮半島における仏教と対外関係
第一節　本章の目的

第二節　高句麗・百済の仏教受容
第三節　高句麗・百済の仏教銘文
第一項　高句麗の仏教銘文
第二項　百済の仏教銘文
第四節　高句麗・百済の仏教銘文と北朝仏教銘文
第一項　高句麗・百済の文教銘文の特徴
第二項　北朝造像銘との比較
第五節　小結
結論

Ⅱ　論文の要旨

序論

戦後、西嶋定生氏によって、中国を中心とする冊封体制の下で東アジアに一定の政治秩序が築かれ、それを背景に周辺諸国の対外関係が展開されたとする「冊封体制論」が提唱された。近年では、この西嶋説の批判を通して、周辺諸国の自立性と独自の交流が注目され、さらには冊封体制論に代えて地域史・海域史といった視角が呈示されている。こうした研究動向に対して、東アジアにおいては「冊封」が中国と周辺諸国の紐帯として機能していること、さらに冊封体制の枠外でも、地域間・国家間において政治・経済・文化・宗教等々を紐帯とした交流が営まれてきたことを指摘する。本論文の目的は、このような問題意識から、朝鮮三国の主体的な冊封体制への関わりを全面的に再検討し、また冊封体制の枠外で営まれた多元的な交流を解明することにあるという。

第一章　朝鮮三国の対中国関係

従来、朝鮮三国の冊封体制への関わりについては、中国からの冊封（爵位授与）と三国からの朝貢（土地の産物の貢納）という中国中心主義的な視点から研究されてきたが、ここでは三国の内部事情と交流・抗争を背景とした主体的な冊封体制への関わりを追究している。高句麗は南進政策を展開して、百済・新羅同盟と抗争していた。このため、直接国境を接している中国からの侵攻を

回避する必要があり、頻繁に朝貢して冊封体制の枠内で自国の安全を図った。これに対して国境を接していない百済は海路を通じて南朝に朝貢し、とくに梁の仏教など先進的な中国文化を受容した。後発の新羅は、やや遅れて中国の冊封体制に参入し、南北両朝に朝貢しているが、本格化するのは唐代に入ってからである。当時、百済と新羅は高句麗の南進に対して同盟して対抗したが、その一方、朝鮮半島南部の加耶地域をめぐって対立していた。とくに百済は倭に軍事的援助を要請し、対価として冊封体制を通して中国から受容した仏教などの先進文化を伝えた。

朝鮮三国の被冊封・朝貢の記録を丹念に網羅し、朝鮮三国の冊封体制に対する認識や関わり方の差異を浮き彫りにしている。

第二章　高句麗と粛慎朝貢

中国北方の絶域に位置する粛慎（一説に吉林省）は、すでに西周に「楛矢石弩」（石の鏃を付けた楛木製の矢）を朝貢したとされ、「粛慎楛矢」は中国の徳化が遙か遠方にまで及んだことを示す「遠夷来貢」の象徴となった。その後、粛慎の朝貢は途絶えるが、魏晋南北朝時代になって再び登場し、「粛慎楛矢」は五胡十六国・北朝においても、東晋・南朝においても、その権威と正当性を象徴するものとなった。高句麗は、自国の朝貢品だけでなく、北方への影響力を背景に粛慎もしくはその後身の朝貢に介入して楛矢を後趙や劉宋に貢納した。中国王朝における「粛慎楛矢」の象徴的な意義を認識した上で、それを利用して冊封体制における自国の立場を強化しようとしたという。

従来の研究では、高句麗の朝貢品については解明されてきたが、高句麗が介入した「粛慎楛矢」については看過されてきた。この「粛慎楛矢」に着目して、高句麗が冊封体制に主体的に関わり、巧みに利用したことを指摘している。

以上、第一章、第二章では、朝鮮三国の冊封体制に対する主体的な関わりを、三国の内部事情と交流・抗争をも視野に入れて、全体的かつ具体的に再検討し、朝鮮三国にとって冊封体制が安全装置として、あるいは先進文化の受容のルートとして機能したことを明らかにしている。

第三章　加耶諸国の対外関係

朝鮮半島東南部の金官加耶（倭の記録では任那）は、鉄の産出と製鉄技術で知られ、鉄を介した海上交易によって発展した。一方、製鉄技術をもたなかった倭は金官加耶から鉄を輸入する必要があり、その対価として米や硬玉製勾玉などを支払っていた。5 世紀に入ると、金官加耶は高句麗・新羅の侵攻を受け、鉄の対価として倭に軍事的援助を求めるようになり、金官加耶と倭の地域間の交易は国家間の外交関係へと変化する。金官加耶が衰退すると、大加耶が台頭するが、倭は大加耶には関心をはらわず、新羅に吸収された金官加耶の復興をめざした。背後には、5 世紀から 6 世紀にかけて倭でも製鉄が行われるようになり、大加耶の鉄を必要としなかったという事情がある。6 世紀には、加耶地域をめぐる百済と新羅の対立が激化する。百済は倭に軍事的な援助を求め、旧金官加耶の「任那問題」の解決に尽力するとともに、中国から受容した仏教などの先進文化・文物を倭に納めている。一方の新羅も倭に軍事的援助を求めたが、倭は任那（金官加耶）の復興を求め、新羅は任那から倭に納めていた調（「任那の調」）を肩代わりして納めている。

金官加耶と倭の地域間の交易が、朝鮮三国の南進政策の展開、倭の製鉄技術の進展などを背景に、新羅・百済と倭の国家間の外交関係に変化していく過程を、文献史料のみならず、最新の考古学発掘調査の成果によって論じている。

第四章　六世紀の日朝関係

第三章を補完する形で、ここでは主に 6 世紀の倭を中心に据えて朝鮮三国との関係を追究している。6 世紀を通じて、倭の対外政策はもっぱら新羅に領有された任那（金官加耶）の復興に向けられた。所謂「任那日本府」については多くの議論があるが、近年の考古学の成果から倭の任那支配を否定し、「任那の調」と表現されるような何らかの既得権益があったとする。百済・新羅とも倭に対して軍事的援助を求め、倭の意向に沿ってこの「任那問題」への対応策を行った。6 世紀後半になると、高句麗もまた新羅と北斉との緊張関係を背景に倭との関係を結ぼうとするが、倭との交渉は失敗に終わる。倭の関心が「任那問題」の解決にあり、高句麗・中国は「任那問題」の外側にあると認識されていたためである。6 世紀を通じて、倭の天皇は「任那問題」を代々継承した。

当時の朝鮮半島では高句麗・新羅・百済の対立が本格化し、いずれも倭との同盟を求めた。倭にとっても朝鮮半島全体を視野に入れた外交政策が必須であったにも拘わらず、一貫して「任那問題」の解決に拘泥し、高句麗まで対外認識が広がるものの、高句麗・中国と直接外交することはなかった。隋が登場すると、朝鮮三国よりやや遅れて600年に遣隋使を派遣するが、結局、663年の白村江の戦いで新羅・唐の連合軍に敗北するまで、倭の基本的な外交政策は「任那問題」の解決という狭小な範囲に限定されていたという。

第三章、第四章では、冊封体制の枠外で展開された朝鮮半島南部の加耶地域と倭の鉄を介した交易、加耶滅亡後には「任那問題」をめぐる新羅・百済と倭の外交の変遷を論じている。倭の対外政策は「任那問題」の解決という狭小な範囲に限定されており、三国魏もしくは南朝以降、長期にわたって中国に使者を派遣せず、冊封体制に参入しなかったことを指摘する。

第五章　古代朝鮮半島における仏教と対外関係

朝鮮三国は、4世紀から6世紀初めにかけて中国から仏教を受容する。高句麗には北朝から、百済には南朝から、冊封・朝貢の公的なルートを介して仏教が伝わった。冊封体制とは疎遠であった新羅は、高句麗から仏教を受容する。仏像様式についても、同じルートを通じて、高句麗には北朝から、百済には主に南朝から伝来したと理解されてきた。

ここでは、5～6世紀に製作された高句麗と百済の金銅仏・舎利龕・舎利容器など15点の伝世品・出土品に刻まれた銘文に注目し、先行研究の録文に訂正を加え、銘文の内容を解釈する。この作業を基にして、従来の研究では看過されてきた銘文の形式に着目し、北朝の主には民間で通行した仏教造像銘の形式と一致すること、使用されている仏教の語彙も類似していることを明らかにしている。ただし、北朝造像銘に共通する皇帝崇拝、鎮護国家意識はみられないという。仏教は冊封体制の国家間の公的なルートを通して受容されただけでなく、別のルートでも伝わったことになる。高句麗には五胡十六国時代以降、華北から亡命者・亡命集団が流入しており、仏教銘文の作成技術も彼らとともに伝来したと推測している。

仏教銘文の「形式」という新たな視点は、中国仏教の東アジア全体への広がりを考察する上でも興味深いものである。

Ⅲ　審査委員会の評価

本論文の対象とする朝鮮三国の対外関係史については、すでに韓国・日本において膨大な研究が蓄積されてきた。しかも、この時代の朝鮮三国・倭について記録した史料はきわめて少ない。このため、このテーマをめぐって生じたさまざまな議論の多くは決着をみないままであり、解決の糸口を探るのは容易ではない。赤羽氏は、韓国・日本における先行研究、最新の考古学の成果を博捜して見事に整理し、中国・朝鮮・日本の関連史料を丹念に蒐集して、この困難な研究状況に真正面から取り組んでおり、先ずはその研究姿勢を評価したい。

戦後、西嶋定生氏によって提唱された冊封体制論は大きな衝撃を与えたが、西嶋説の批判的継承から、近年では周辺諸国の自立性、独自の交流といった問題に研究が集中し、さらには冊封体制とは別次元の地域史、海域史といった新たな枠組みも呈示され、結果的には、研究の細分化、分散化といった状況も生じている。赤羽氏は、こうした研究状況に対して、中国を中心とする冊封体制が周辺諸国にとっても意義があったことを指摘し、「冊封」を中国と周辺諸国を双方向的に結ぶ紐帯として改めて位置付ける。本論文はこうした問題意識から、4～7 世紀における朝鮮三国の主体的な冊封体制への関わりを、三国の内的契機をも充全に視野に入れて、改めて全体的に追究し、朝鮮三国にとっても冊封が有意義なものであったこと、また三国の間ではその意義に差異があったことを明示した。のみならず、冊封体制の枠外で営まれた地域間の交流にも注目し、朝鮮半島南部の加耶・任那をめぐる朝鮮三国と倭の関係、また仏教を紐帯とする高句麗・百済と中国の多元的な交流について、新たな見解も含めて明らかにしている。本論文の論旨は明晰であり、また十分に説得性をもっており、この分野の研究に新たな一石を投ずるものとして評価してよい。

とくに、これまで看過されてきた高句麗による「粛慎楛矢」の朝貢について指摘したことは、高句麗の主体的な冊封体制への関わり方の具体相を明確に示

すものであり、卓見である。また、高句麗・百済の仏教銘文について、これもまた看過されてきた銘文の「形式」に着目して、北朝の造像銘の形式と一致することを指摘したのは、大きな成果といえよう。

しかし、なお幾つかの問題点が残されている。使用した文献史料・石刻史料には別系統のテキストが伝わっているものもあり、史料の扱いについてより精度を高める必要がある。また、論証についてもやや厳密さに欠ける箇所がある。たとえば、高句麗の「粛慎楛矢」の事例は複数の文献に記述されており、内容が少しずつ異なっている。その場合、史料を羅列するだけでなく、文献の相互関連性をより緻密に分析する必要があろう。高句麗・百済の仏教銘文についても、現地調査による文字の判読、仏像の真偽の究明など、より徹底したアプローチが望ましい。とはいえ、これらの問題点があるにせよ、そこで示された見解が卓越したものであることには変わりない。

本論文は、朝鮮三国の対外関係史の研究を着実に一歩進めたものとして高く評価でき、今後とも残された課題を解明し、研究を深化、進展させることが十分に期待できる。

以上、審査の結果、本審査委員会は、赤羽奈津子氏が龍谷大学学位規程第3条第3項に基づき、博士（文学）の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2014（平成26）年7月16日

主　査：都築　晶子
副　査：木田　知生
副　査：田中　俊明